あとがき

本書は，2014 年 12 月 20 日に大阪大学で開催した研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗)』のデジタル化と公開の可能性」（主催：NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点政治史資料研究会，共催：大阪大学未来研究イニシアティブ支援事業［21 世紀課題群と中国］，科学研究費補助金・基盤研究（C）「東洋学学術資産としての石濵文庫の基礎的研究」［研究代表者・堤一昭］）の記録である。

大阪大学の貴重資料である石濵文庫は，1940 年代に満洲国で発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗) 』を世界で唯一，ほぼ完全な形で所蔵している。当時の文化・民族政策とメディアの関係のみならず，現在にいたる民族意識を知りうるものとして国際的に注目されている。このセミナーでは，資料の保存とデジタル化による公開・学術利用にむけて，中国の内モンゴル大学モンゴル学院，東洋文庫などとの連携，学術ネットワーク構築の可能性をめぐって，東洋学，内モンゴル近代史，東アジア国際関係，モンゴル近現代文学など多方面から報告，さらに『フフ・トグ』紙の参観と東洋文庫におけうデジタル化事業についての東洋文庫のとり組みをふまえて，専門領域を超えたふくらみのある対話と討論が展開された。

今回のセミナーは，NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点政治史資料研究会としては，2014年3月開催のワークショップ「20世紀中国政治史の視角と方法」につづくものであり（OUFC ブックレット第5巻，2014年9月），20世紀中国政治史像の再構築にあたって，史資料の保存・利用という立ち位置から内外の研究交流を展開する処方についていくつかの有意な処方・ヒントを得ることができた。

同時に，大阪大学石濵文庫を前近代から近現代にいたる多言語の複合的学

術資産と捉え，その再定置にむけた歴史学・図書館学・博物館学から諸言語（外国語学）や知的財産権に関する法制度と法曹実務等の総合的アプローチが要請されている。このことは本セミナーを共催した大阪大学未来研究イニシアティブ「21 世紀課題群と中国」と堤科研「東洋学学術資産としての石濵文庫の基礎的研究」が共有する課題であり，今後，石濵文庫の近現代東アジア研究における活用の可能性を探求することを通して，多言語の複合的学術資産活用モデルを展望したい。（田中仁）